

六月

どこかに美しい村はないか  
一日の仕事の終わりに一杯の黒麦酒  
鍬を立てかけ 籠を置き  
男も女も大きなジョッキをかたむける

どこかに美しい街はないか  
食べられる実をつけた街路樹が  
どこまでも続き すみれいろした夕暮は  
若者のやさしいさざめきで満ち満ちる

どこかに美しい人と人の力はないか  
同じ時代をともに生きる  
したしきとおかしきとそうして怒りが  
鋭い力となって たちあらわれる

